『西南アジア研究』No. 36, 1992

スリランカ・タミル漁村における女性の地位
—親族組織と経済の領域を中心に—

田 中 雅 一

1 序論

本論の目的は,スリランカのタミル漁村Dにおける漁民カーストの女性の地位に関して考察することである。

性差別のない世界の可能性を探ろうとするフェミニズムにとって,男性優位の社会がはたして普遍的なものであるかどうかという問いは根本的なものである。父権社会に対応するような母権社会と言うものが存在しないということは人類学の常識である。それではなぜ女性が優位となる社会は存在しないのか。女性は遺伝学的に「弱い性」なのか。「生む性」として出産や育児に深く関与するために,男性にたいし従属的な地位に甘んじているのか。生物学的な特徴と関係がないとすれば,いかなる要因でこれほど多くの社会が男性中心なのであろうか。以上のような問題意識に基づいて,1970年以後の女性の地位についての研究が女性の人類学者を中心に精力的に推し進められてきた。理論的なものから個々の社会におけるケーススタディまで,過去20年間に出版されたものは膨大な数にのぼる[1)]。

しかし,現時点においても女性の地位をめぐる研究はなお錯綜している。何をもって女性の地位が男性との関係で,あるいはほかの社会の女性との関係で高いまたは低いと評価できるのか。何を基準に男女は平等と判断できるのか。たとえば人類学者の間では,相互補完的な男女の関係に平等性を認める立場と性差の解消を平等の実現とみなす立場の二つに大きく別れる[2)]。

まずわれわれに必要なのは地位が多元的で文脈依存的であるという認識である[3)]。地位が多元的であるなら,地位を構成する変数も複数であり,変数間に明白な因果関係を想定したり,そのうちのひとつをもっとも重要であるとみなしたりするわけにはいかない[4)]。通文化的な比較とそれに基づく一般論構築の可能性を念頭におきつつも,現時点

では「普遍的な理論や壮大な構想，世界全体に適用可能な主要決定要因の探究」[Mukhopadhyay and Higgins 1988：486]を避け，限定された領域での分析を進めるべきであろう。とはいえ，本論では地位や平等の概念を否定するといった方向をとることは避けたい。男女の関係を社会的な要素を考慮して論じる際にはなお有効と考えるからである。

本論では後述するワドリーの議論を批判的に考察するという観点から，とくに親族と経済の領域での女性の地位について論じることにする。まず，D村での男女関係を理解する上で興味深いいくつかのエピソードを紹介し，つぎにどのような女性像がヒンドゥー社会の理念として流布されているのかを明らかにする。そのあと，D村の概略，婚姻規則と親族組織，女性による経済活動について順次記述する。

2　「性差」との出会い

ヒンドゥー教徒の女性というと，次章でやや詳しく述べるように，父権社会において虐げられた存在というイメージが強い。しかし，筆者はD村での調査から，村における性差というものが，書物を通じて学んだヒンドゥー女たちの姿からかなりかけ離れていることを確信するにいたった。いくつか例を挙げることにしよう[5]。

まず妻との諍いのせいで夫が自殺した例を二つあげたい。一つは村の東部に広がるラグーンで漁をする漁師の場合である。かれは新しい船を購入するためお金を貯めて，約3000ルピー（1ルピーは1982年当時およそ10円）を妻に預けていた。しかし，妻は夫に無断でこの金を義理の息子に貸した。このため男は予定通り船を購入することができず，他人の船を借りて漁に出る日が続いていた。しかし，自分の船でないために思うように漁をすることができない。それが原因で妻との諍いが続いた。男はある日漁に出ると言って早朝に家を出たあと首吊り自殺をした。

もう一つは，村で一，二を誇る地引網の網元の場合である。経済的には裕福だが，妻は毎日酔っぱらって仕事から帰る夫を嫌って，二人の間に喧嘩が絶えなかった。そうこうしている内に妻は実家に帰り，取り残された夫の方は自殺してしまった。

夫の自殺の原因を妻との関係にのみ求めるわけにはいかないかもしれないが，村人たちはもっぱら妻との諍いが直接の原因であると噂し合っていた。

自殺とまではいかないにしても，妻と夫がどなりあって喧嘩をする場面には何度も出くわした。女たちは人前で大声を出すことをはばからない。なにか問題があれば，ほかの家にまで怒鳴りこみにいく。また小学校の校長をしていたこともある村の長老の一人

を近所の女たちが取り囲んで,かれの親類の者の不祥事を問いつめている場面を目撃したこともある。

つぎのエピソードはむしろ失敗談の部類にはいるが,D村の男女の関係を理解する上で興味深いものである。

筆者はいくつかの世帯を選んで,毎月一週間連続して家計の調査を行なっていた。聞き取りは家計を握る女性からであったため妻に頼み,ときどき筆者も同伴するという形をとっていた。これは,そのうちの一つの世帯で起こったことである。筆者自身もなんどか訪ねたことのある家で女,子供たちと談笑していると,見知らぬ男性が女たちの後ろに立っている。かれは話を聞いているだけでわれわれの話の輪に入る気はないように見えたし,女たちもかれの存在をまったく無視しているように思われた。筆者がつい女たちの一人にかれは誰かと尋ねると,なんとその家の主人だという。のちに述べるように,D村の居住形態は妻方居住である。夫は結婚後妻の実家に住む。この家にも長女の夫が結婚後住み込んでいる。しかし,筆者が無遠慮にも誰かと尋ねたのは,長女の夫ではなく,父である。かつてはかれも外から移り住んだのかもしれないが,いまでは名実ともにこの家の主人であるはずの男だ。しかし,改めて注意深く観察するとかれの家での振舞いはきわめて遠慮深いもので,悪く言えば影が薄い。どちらかというと妻や娘たちの言いなりになっているような印象を受けた。女を中心とするその場の雰囲気が筆者に無遠慮な質問をさせたと言っても過言ではない。

またあるとき,今度は妻だけが同じ家を訪ねた。帰る頃になると強い雨が降り始めた。このとき傘をさして妻を家までおくってくれたのはこの主人であった。これはすでに暗くなっていたこともあり,ほかに男性がいなかったため,おかしくない振舞いと思われる。しかし,かれが妻をおくることになったのは女たちが決めたものだ。

この話には続きがある。翌日同じ家を訪ねて帰る頃になると,また雨が降り始めた。ところが傘がみつからない。女たちが手分けして家中を捜すが昨日使用した傘がないのである。しようがないので傘無しに帰宅しようと妻が家を出ると,なんと家の主人がすでに傘をさして外で静かに待っていた・・・

もちろん男たちがいつでも女たちの言いなりになっているわけではない。男は気が優しく穏和で,女たちは気丈でしたたかだというような一般化は慎むべきあろう。にもかかわらず,以上のような事例をまったく例外的なものとして排除するわけにはいかない。自殺した夫たちの妻がいたたまれなくなって,村を出たり,村八分になったりするわけではない。たまたま妻とうまくいかず,酒で気を紛らすこともできないような場合,たとえ

夫が自殺してもそれはかれらの個人的な問題だ,とするような雰囲気が村には感じられた。

3　貞女の理念

インドの女性はしばしば父権社会の典型的な犠牲者として描かれてきた。まず,いくつかの文献を参考にして,女性の理念とそれに密接に関係する高カーストの女性たちの現実を描き出してみよう[6]。

高カーストの間では幼女婚が理想である。小さいときに親が結婚を取り決め,10歳になる前に正式に結婚をし,初潮が始まって少ししたら夫方に嫁ぎ,夫の拡大家族の一員として働く[7]。女性は夫を神とみなし,夫に心身ともに仕える。夫との年齢の差はしばしば10歳以上であり,この年齢の差が夫の権威を確実にする要因の一つである。家事をとりしきるのは義理の母である。花嫁は夫とその家族のもとで,親しく語ることのできる者もなく惨めで孤立した生活を強いられる。花嫁に期待されていることはなによりも息子を生むことである。息子は祖霊を供養することのできる存在として娘よりも重視されている。

花嫁側は花婿側にたいして地位が低い。花嫁を与える側は,多額の持参金を夫側に与えなければならず,3人娘をもつと破産してしまうと言われる。このため娘であることが分かったら生後すぐに殺してしまう風習も生まれた。たとえ生き延びようと,教育や医療の面で兄弟よりも差別を受ける[8]。

女性の幸せは早く結婚し,息子をもうけ,夫に献身的に仕え,そして夫よりさきに死ぬことである。しかし,夫が妻より先に死ぬと,かれの死は妻のせいとされ,不吉な女性というレッテルを貼られる。このため未亡人は,孤独な生活を強いられる。食事はいつも最後だし,赤など派手な色のサリーをまとったり,装飾品などで身を飾ってはいけない。結婚式などおめでたい儀礼に参加することもできない。未亡人はセクシュアリティを想起するものを剝奪され,隔離される。こうした惨めな運命から逃れるため彼女に残されている唯一の方法は,夫が死んでその死体が火葬されるときに,その炎に飛び込んでともに死ぬことである。これが18世紀にサティーとして英国人たちに理解されることになる風習である。サティーを行なった女性は貞女の鏡,女神として後代まで崇拝の対象となる。

ヒンドゥー社会は階層社会である。女性は集団外部の男性,とくに低い地位の男性と関係をもつことによって,彼女の家族,親族,サブカースト,カーストなどの集団に不名誉

をもたらす。集団の地位は彼女の振舞いで貶められるのである。したがってヒンドゥー社会において女性のセクシュアリティのコントロールはきわめて重要な問題であることが分かる。

しかも女性のセクシュアリティはそれ自体きわめて危険である。女性は月経によっていつ不浄になるか分からないし,感情を抑制する強い意志も持っていない。女の性欲は果てしなく,男の精をとことんまで吸い尽くしてしまうかもしれない。不満がうっ積すると強大な破壊力へと変容する。女性はその性的魅力によって男性が求める解脱への道を阻む存在である。だが夫を通じて女性のセクシュアリティがうまく統御されれば,豊饒力,恵みの源泉となり,息子が生まれ,集団が栄える。

以上から,女性のセクシュアリティをいかに統御するか,これが父権的な階層社会の編成にとって根本問題であることが理解される。女性の理想とされる貞淑な妻(*pativratyā*)とはセクシュアリティを統御され,社会に繁栄をもたらす女性である。幼女婚,多額の持参金,夫婦の年齢差,夫方と妻方との地位の相違,跡取りとしての息子の重視,未亡人の地位の低さ,サティーなど,男女関係をめぐるこうした慣習は父権社会での女性の地位の低さを明確に物語っている。

以下ではスリランカのD村における女性のあり方を検討していくことにしよう。

4 調査地域の概要

タミル漁村Dはスリランカの西岸部に位置する(図1)。その規模はかなり大きく,1982年現在総人口4,321(793戸)のうち,ヒンドゥー教徒が3,767(694戸),イスラム教徒372(67戸),キリスト教徒182(32戸)である(表1参照)。調査の対象となったヒンドゥー教徒のカーストは,漁民カースト(*Karaiyaṉ*)がいわゆる「支配カースト(dominant caste)」として圧倒的多数を占め,経済的にも優位にあるところに特徴がある(667戸)(表2)。漁民カーストの中には少数ながら漁業に従事していない世帯もある。

村には漁民カースト以外に,司祭職を伝統とする菜食のブラーマン(*Pirāmaṇaṉ*),非菜食の司祭カーストであるパンダーラン(*Paṇṭāram*),金細工師(*Taṭṭāṉ*),散髪屋(*Ampaṭṭaṉ*),村の清掃を担当するパライヤン(*Paṟaiyaṉ*),屎尿処理をするサッキリヤン(*Cakkiliyaṉ*)が少数ながら存在する(表2参照)。またD村の生活に密接に関係している洗濯屋(*Vaṇṇāṉ*)がDに北接するA村に住む。A村は1960年頃にD村の人々による入植が始まって村となったもので,村人たちの間ではAはDの一部という意識が強い。

ヒエラルキーの順位はブラーマンが最高位を占めるが,次位に関しては,漁民カースト,

金細工師,パンダーランの三者で意見がわかれる。かれらの下に,洗濯屋,散髪屋,パライヤン,サッキリヤンの各カーストが続く。サッキリヤンを除いたすべてのカーストは,年中行事や通過儀礼においてなんらかの奉仕義務をもち,パトロンより報酬を得る。

村の主要生業に関わるのは漁民カーストであるから,他のカーストは経済的にはかれらに依存している。D村は原則的にはかれらの村なのであり,かれらだけが真の村人である。D村の漁民カーストたちはもともと17世紀に散髪屋や洗濯屋を連れて,南インドよりスリランカに渡来してきた人々の子孫であり,原則としてスリランカの他の地域の漁民カーストと交わ

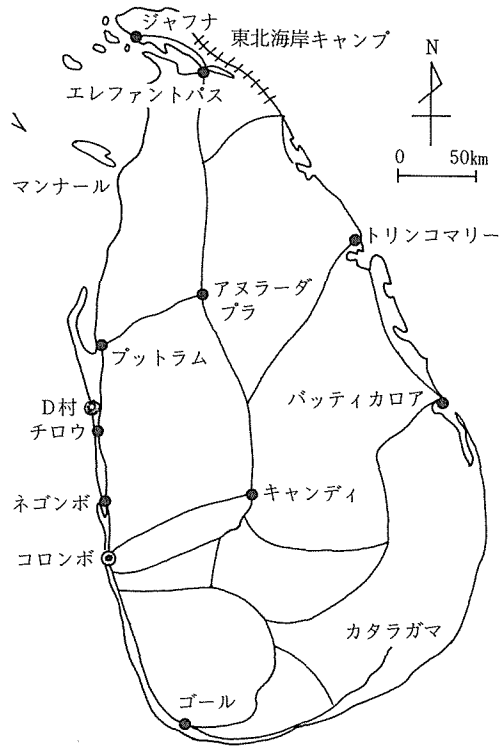

図1　スリランカ

表1　D村の民族(宗教)構成(1983)

宗　教	人　口(%)	世帯数(%)
ヒンドゥー教	3767(87.2)	694(87.5)
イスラム教	372(8.6)	67(8.4)
キリスト教	182(4.2)	32(4.0)
合　計	4321	793

表2　D村のカースト構成(1983)

カースト	人　数	世帯数
漁　民	3658	667
ブラーマン	7	1
パンダーラン	5	1
金細工師	37	8
床　屋	22	4
パライヤン	9	2
サッキリヤン	15	3
その他・不明	14	8
合　計	3767	694

ることなく，村内婚を繰り返して今日に至っている。D村とA村とがかれらの村であるという意識は非常に強いのである。以上の点から本論において村人というのはことわりのないかぎり漁民カーストを指すことをことわっておく。

なお，漁業に従事する村人に限ると，地引網を所有する網元とその下で働く労働者たち，そしてそのどちらにも属さない筏漁師や船外モーター付きボートを使用する漁師，海ではなくラグーンでエビをとる漁師，魚商人などに分かれる。網元たちはコロンボに魚を出荷し，農村での大土地所有者のように村の有力者層を形成する。表3からも明らかなように，D村の漁民カーストに限って考察すると，網元が73人，労働者ら網元に依存している人々が550人，地引網以外の漁業に携わる人々が147人，そして商人らが42人である。

スリランカにおける漁業はモンスーンによって大きく左右される。西海岸に位置するD村では4月から10月にかけて吹く南西モンスーンのため海が荒れ，多くの漁師が東北海岸のキャンプに移動し，そこで漁を続ける。モンスーンの変化に応じて一年が二つに分かれる。労働者と網元との契約は半年ごとに決まる。東北海岸のキャンプでは漁獲量に関係なく月極の賃金を受け取るが，D村では一日の漁獲売上の3分の1が網元に，残りがおよそ30人の労働者のものとなる[9]。

表3　漁民カースト成人男性の職業分布(1982.11-1983.2)

仕事		人数
漁業	網元	73
	労働者	532
	網元の所で働く労働者以外の人々	18
	ボート所有者	38
	ボート手伝い	23
	筏	59
	ラグーン漁師	27
	商人	24
小計		794
漁業以外	ココヤシ園所有者	11
	店主	16
	店舗でのアシスタント	2
	教職	12
	公務員その他	15
小計		56
学生		50
失業者・定職無し		45
計		945

5　婚姻と親族組織における女性

前章から明らかなように，D村は漁民カーストを中心とするタミル漁村で，A村を除くと回りの村々から孤立した独自の世界を形成している。かれらの通婚範囲は原則として隣接する二つの村(総人口約5千人，950世帯)に限られている。例外はD村出身でたまたま村外に住んでいる人の子供との結婚である。

漁民カーストはさらに細かい内婚単位に分かれる。まず，漁民カーストは大きく二つのサブカーストに分かれ，両者の間での通婚は厳しく禁じられている。そ

のあいだに地位の優劣があり,劣位のサブカーストは伝統的に居住区も制限されていた。数年前までかれらは祭りの時に松明を持つ義務が課せられていた。また村のブラーマン司祭がかれらのために儀礼をすることは禁じられていた。

上位の漁民たちはさらにいくつかの内婚集団に分かれる。ここで重要なのはプラッタールとソンダムという概念である。プラッタール(*puṟattār*)には名前があり,その名前は父系を通じて継承される。上位のサブカースト内には約15のプラッタールがあり,大きく3つの地位集団にまとめられている。プラッタールの地位はD村への移民の順番に関係しているという説がある。プラッタールも本来は独立した内婚集団であった可能性が高い。

ソンダム(*contam*)とは自分たちの人々という意味で,自己中心の共系的な広がりを持つ集団である。個々の集団に名前はなく,日本でいう親類に似ている。ソンダムという言葉は姻族を含むような親戚あるいは「近親」ととらえるのが適切である。人々はソンダム内部での婚姻が理想的であると考えている。それは理想的には同等の地位のプラッタール間あるいは同一プラッタール内の結婚範囲と重なるが,自己中心的であるという点でより柔軟性があり,また範囲も曖昧である。ここで重要なのはD村には単系出自集団と呼ばれるような外婚集団,とくに父系の外婚集団が存在しないということである。

ソンダム内の婚姻を理想とするという意味は,すでに血縁あるいは婚姻によって関係している人々との結婚が望ましいということである。とくに交叉イトコ(イトコの親が兄妹,姉弟など異性の場合)にあたる人々との間での結婚がもっとも望ましいとされる。D村では父方母方を問わない双側交叉イトコ婚(男にとって母の兄弟の娘や父の姉妹の娘との結婚)が一般的である。ただし,適当な交叉イトコがいなければ,平行イトコ(男にとって母の姉妹の娘や父の兄弟の娘)に分類される人々でもかまわない。「分類される人々」という言葉については若干の説明が必要である。D村の漁民はドラヴィダ型親族名称を使用する。このため交叉イトコを示す名称はかならずしも実際の交叉イトコだけに使用されない。妻の兄弟(義理の兄弟)も交叉イトコと同じ名称で呼ばれる。平行イトコは実の兄弟姉妹と同じ言葉で呼ばれる。たとえば自分より年上の男性平行イトコは「アニ」となる。一組の姉妹と結婚している男同士も平行イトコ(キョウダイ)である。ここでその原理についての詳述は避けるが,D村では,実際よりはるかに多くの人々が交叉イトコや平行イトコ(キョウダイ・シマイ)とみなされているのである。

どの程度の割合で実際の交叉イトコと結婚しているのかをみていくと,実際の交叉イトコ間の確率は父方,母方の交叉イトコどちらかと結婚しているものが969夫婦の26.6%

である。これに,なんらかの形で結婚前から配偶者と親戚関係にあったものを加えると,58.9%の結婚がソンダム内部で行われていることがわかる。

村内婚とカースト内婚を原則とし,近親とくに交叉イトコを配偶者の理想とするということは,結婚をする当事者たちはそれが親の決めた結婚であろうと,まったく見ず知らずの相手と結婚するというのではない。

D村では,スリランカのほかの地域にくらべて持参金が高くない。一般化は慎まなければならないが,すくなくともD村ではソンダム婚と持参金の額とは関連があり,ソンダム婚の場合,持参金の額はそうでない場合よりも低い。

夫婦間の年齢は,男性の方が年上でしかもかなり差が大きくなければならないという必要はない。519の夫婦間の平均年齢差を調べると5.4歳である。しかし,そのうち23が女性の方が年上で最高6歳の差がある。さらに年齢が同じという場合も29件あった。つまり,約1割の結婚には男女間の年齢差がないか,あるいは女性が年上であるということである。これは前章で述べた結婚の原則とはかなり異なると言えよう。

冒頭で示唆したように,居住規制は原則として妻方居住か独立居住である。つまり,結婚すると夫の方が妻の実家に移り住む。妻はよそ者として舅や姑に気を使い,肩身の狭い思いをする必要はない。血縁に基づく女性の結束は結婚のあとでもあまり影響を受けないのである。

また女性たちだけでなく,兄弟姉妹の関係も結婚で途絶えることなく持続する。とくに夫が地引網の労働者で,兄弟がボート漁師である場合,夫が東北海岸に移動すると,妻は自分の兄弟たちのボートのキャンプで働く。

娘が多い場合,独立した家屋を建ててそこに移り住む。しかし,その場合でも家屋は娘の実家に隣接している場合やそれほど遠くないところに建てられる。原則として最後に結婚する末娘が家にとどまって,年老いた両親のめんどうをみる。相続される財として大事なのは家とその回りの土地,網や船などの漁具である。前者は家にとどまる女性に,後者は男にのみ相続される。田畑などの農地は均等配分であるが,この種の土地を持つ漁民はほとんどいない。

父系出自集団が欠如しているという事実に関連して,子供ができなければ離縁であるとか,なにがなんでも男の子を生んでもらわなければ困るという考え方はD村ではない。ほかの地域についての資料が不十分なためどの程度一般的といえるのか分からないが,養取がD村では繁雑に行なわれている。養取の対象は親類の子供が多いが,ときには病院からもらってくる場合もある。この場合もかならずしも男子をということはない。

以上,婚姻をめぐる習慣を中心に紹介してきた。通婚圏の狭さや妻方居住の結果,婚姻によってD村の女性たちの生活様式はあまり変化しないといえる。それが彼女たちの生活力の強さ,あるいは心理的な安定に寄与しているといえよう。

6　女性の経済活動

女性の仕事の中心は,報酬を受け取ることのないいわゆる「家事」であり,主に乳幼児の世話,食事の仕度と後片づけ,水を井戸から汲んできて飲み水を確保することの3つが含まれる。しかし,これらは家庭内での仕事であり,報酬を受け取るような種類のものではない。

女性が報酬を受けることができる仕事の多くは,男の仕事と同様に,きつく不定期である。しかし,仕事を通じて女たちは現金収入を獲得し,お金を貯めることもできる。経済的な自立も可能である。女性の中には商売気があり,鮮魚や干し魚の行商でたいへん成功した者もいる。表4によると,18歳以上65歳以下の成人女性の中でおよそ30パーセントがD村での漁業期(10月から4月)において仕事をもつ。これには報酬無しに夫や息子の仕事を手伝う場合を含んでいない。

以下では表4を参考に,女性の従事する主要な職種について紹介したい。

浜辺に建てられた網元の作業所で,女たちが15人から30人ちかく集まって,午前中に地引網漁でとれた魚の,種類による仕分けに精を出している。この魚は氷と一緒に箱に詰められてトラックでコロンボの卸市場へと出荷される。小魚がたくさんとれたとき,魚の値が下がっているときなどには,すぐに出荷しないで干し魚にする。干し魚をつくるためにはまず腐らないように内臓を包丁で取り出す作業をしなければならない。これも女たちの仕事である。

女たちの働く網元と,彼女たちの夫や兄弟,息子が働く網元とはかならずしも

表4　漁民カースト成人女性の職業分布(1982.11-1983.2)

仕事		人数
漁業	網元(未亡人)	4
	作業場で労働	144
	魚商 その他	52
小計		200
漁業以外	ココヤシ園所有	4
	店主	3
	店舗でのアシスタント	3
	事務、先生	3
	マッタイ作り	10
	マット作り	9
	アラック作り	29
	ロープ作り	11
	仕立屋	24
	その他	13
小計		109
学生		19
とくになし		672
計		1000

一致してはいない。網元自身が近親であるなら,血縁関係が理由で作業場で働くこともあるが,夫が一介の労働者にすぎないのなら,同じ網元のところで働く義務はない。自分の家から作業場が近かったり,網元の近所であったり,また雰囲気がよい,といった理由からどの作業場で働くかを決める。どちらかというと人手不足のため網元の方も集まってくる女性を拒むということはない。いやになれば女はいつでも作業場を替えることができる。女は報酬としてその日にとれた魚を受け取る。彼女の受け分は夫の稼ぎより多いこともある。

報酬の一部は家庭での消費にまわし,残りは庭で干し魚にする。1週間ほど干した後,これを村の干し魚商人に売る。この稼ぎは1日10〜20ルピーである。干し魚商人は主に女性で,毎土曜日と日曜日に開かれる定期市に干し魚を運んで売る。平均すると利益は毎週300ルピーくらいだが,中には1000ルピーもの利益を挙げる商人もいる。ちなみに小学校の先生の初任給が1ヶ月1030ルピーである。女性の中には少数だが,競市で鮮魚を買って,これを内陸部の村に売りにいく人もいる。

自分の夫や兄弟,息子が小型の船外エンジン付きのボートや筏で漁をしている場合,女たちは漁のあと浜辺に引き揚げられたボートや筏の回りに集まって,刺し網にひっかかっている魚を取り外し,これを村の競市場に運んで,現金に替える。彼女たちの仕事は専門的というよりは,近親のための手伝いという性格が強い。

南西のモンスーンが吹き始め,D村での地引網漁が停止すると,男たちとともに東北海岸に移動する女たちもいる。東北海岸での地引網漁は規模が小さいため,女性をあまり多く必要としない。女性たちの中にはボートや筏漁をする自分の兄弟や夫の仕事を手伝うために東北海岸に移動する者もいる。筏にくらべて漁獲量の多いボートでは干し魚を作るためにすくなくとも2名の女性を必要とする。D村に残る女性たちの中には5年ほど前から東北海岸で加工された干し魚を購入し,ロリーを雇ってこれを運び,D村の近くの定期市場で売る者がでて,成功を収めた。

村で漁が行われている間は生活力のない女でもなんとか生活できる。しかし,シーズンが終わると,仕事にあぶれるものも出てくる。女性の多くは,東海岸で半年の間働くことを条件に網元が男たちに払った契約金を生活費にまわして暮らす。しかし,そうした男もいない家庭では,女たちは塩田へ出稼ぎに行く。

D村の女たちは北部にあるエレファントパスとD村に近いP塩田に出稼ぎに行く。後者は仕事が休みの週末には帰ることができるが,前者の場合,半年近く村を離れて塩田内部にある施設で生活をする。エレファントパスの場合に限って言うと,出稼ぎは1965年

頃から始まりDとAの両村から毎年約120名の女性たちと数人の男性が,村出身のカンガーニ(*kaṇkāṇi*)と呼ばれる責任者3名に募集され,かれらの監督のもとで働く。彼女たちはトタン張りの長屋に,部屋を数名で共有して生活する。朝はまだ涼しい6時頃に集合して点呼を受け,その日の仕事を割り当てられる。沈澱した塩を鍬のような道具でかきだす仕事と,これを頭にのせてトロッコのところまで運ぶのが主要な仕事である。炎天下で半日働かねばならないこと,他の地域からきた男性とのかけおちや恋愛結婚がしばしば生じることなどから,他の仕事にくらべて一段と低くみられている。このため塩田に出稼ぎに行ったことがあるのを隠したがる女性も多い。労働者たちは一ケ月に500から600ルピーを受け取る。

漁業関係の仕事や塩田での出稼ぎ以外で,多くの女たちが関わっている重要な現金収入の道は椰子酒(アラック)の密造である。彼女たちはこれを漁師たちに売るのである。酒の密造は禁止されているが,台所で簡単にでき,外に出かける必要もなく,収入もいい。軌道に乗ると,1日30ルピー前後の利益を得ることができる。

マッタイ(*maṭṭai*)と呼ばれるココヤシの葉の加工作業もD村の女性の間では,数こそ少ないが専門的に行なわれている職業である。女性たちはこの地域のココヤシ園から葉を買い,村の東側の沼沢地の溜り水に数日間浸しておく。それから葉を編んで業者に売る。マッタイはさまざまな形で使用される。干し魚をコロンボに出荷するときにはマッタイで作った籠にいれてトラックで運ぶ。家屋や作業場も多くの場合マッタイで屋根が葺かれ,壁や家囲いにも使用される。慣れている人で週100ルピーほどの利益がある。

ほかに,小さな雑貨店の経営や,シャツなどの仕立て,お菓子を作って茶店に仕出しをしたり,路上で野菜などを売る女もいる。さらに藁で編んだマットを作ったり,ココヤシの果皮の繊維からロープを作る女性たちがいる。

以上,D村の女性たちが従事している仕事を紹介してきた。これらの仕事は安定しているものではない。ホワイトカラーに従事する女性の数が男性にくらべて圧倒的に少ないというのも,村の女性が仕事に就くことの難しさを物語っている[10]。しかしながら,女性たちは経済的に男性につねに依存しなければならないという状況にはない。漁業期には作業所で仕事ができるし,シーズンオフの南西モンスーン期には塩田で働くこともできる。シーズン中の労働者の平均収入は387.8ルピーである[11]。塩田での賃金とキャンプ地での地引網労働者の賃金を比べても,前者が約500～600ルピー,後者が三食付きで400～500ルピーと大差ない[12]。また能力と機会さえあれば,干し魚などの卸業で成功するかもしれない。女性一人で住んでいる場合や,男の働き手のない場合が結構あるのも,

経済的な独立の道が開けているからといえよう[13]。

7 考察

本論の第二章で描写した貞女を理念とする女性のあり方とその理念に基づく女性のセクシュアリティを統御する諸制度は,厳密に言えば,北インドの高カーストの女性の生活様式から生まれたものと考えてもよい。幼女婚やサティーが南インドに存在しなかったとは言えないが,花嫁が経験する婚家での惨めな暮らしぶりなどは,夫方居住が一般的で村内婚を認めない北インドの花嫁が経験する典型と言えよう。

北インドと南インドを比較して,女性の地位の差について考察を加えた人類学者にワドリーがいる。彼女によると,タミル人たちは一般に規定的な交叉イトコ婚を行なう。このため南の女性たちはまったくの他人のところに嫁入りするのではない[Wadley 1980：162, cf. Ram 1991：169-70]。また北部インドにくらべると通婚範囲も一般に狭い。南インドの稲作の方が北インドの小麦の生産よりも集約的で多量の労働力を必要とする。このため女性の経済的な貢献が大きい。こうした要因に加え,南では娘が生まれても喜ばれ,医療サービスを受ける機会にも恵まれ,生存の率も高いという。

ここではワドリーが第一に指摘している交叉イトコ婚と女性の地位の関係について考察してみたい。まず,ワドリーと異なり,交叉イトコ婚を否定的に捉える立場から検討しよう。婚姻とは女性の交換に基づく親族集団間の同盟であるとみなすレヴィ＝ストロースの理論[レヴィ＝ストロース 1977]を受けた形で,女性の地位が低い理由を,女性が同盟の手段として,交換の対象であるかぎり,自分の運命を自分で選択できないという事実に求める立場がある[Rubin 1975：174-77]。レヴィ＝ストロースのように,交叉イトコ婚を単系出自集団の典型的な同盟婚とみなす限り,女性の自立性を否定するものとなり,ワドリーの立場と対立することになる。しかし,D村の場合,交叉イトコ婚によって実現されるのは同盟関係ではなく,ソンダムという内婚集団の存続である。繰り返すがD村には単系出自集団は存在しない。この点で,交叉イトコ婚をそのまま単系出自集団間の女性の交換婚とみなし,否定的に捉えるわけにはいかない。ここでの問題は,交叉イトコ婚の役目を普遍的に同じと想定する立場である[14]。

それではワドリーのように,交叉イトコ婚と女性の地位との間に積極的な関係を認めていいのであろうか。交叉イトコとの結婚を理想とする近親との結婚は,女性には心理的な緊張を和らげる要因となっているかもしれないが,そのままワドリーが想定しているように,女性の経済的・政治的な自立や活動範囲の広さ,夫との対等な関係を保証する

ものではない。たとえば,南インドのディークシタル・ブラーマン司祭たちの通婚範囲は原則としてひとつの町に限られていて,すべてが顔なじみの親戚同士という関係である[15]。しかし,婚姻年齢は最近まで低く,月経の期間中の隔離など北インドの基準からみてもかなり厳しい統御を女たちは受けている。ここから南インドの性差のあり方を交叉イトコ婚やそれと密接に関係すると思われる限られた空間での結婚規則に限定して議論することはできないと思われる。

D村の女性のあり方を考える上で重要なのは,結婚規則よりもむしろ,父系出自集団の欠如,息子をもうけることへの執着の欠如,夫婦間の年齢差の小さいこと(あるいは年齢へのこだわりがないこと),移民による男性の長期の不在,財産の相続や結婚後の居住形式に認められる母系的特質,そこから生じる女性の間での結束などであろう。フリードルが指摘しているように,母系的な特質を備えた制度は男女関係,とくに夫婦関係に大きな影響を与える[Friedl 1975：66-73]。

つぎに経済活動について考察してみたい。ワドリーは交叉イトコ婚の存在とともに経済活動への参加の度合も南インドにおける女性の地位の高さに関係していることを示唆していた。女性の地位の高さを経済的な貢献度あるいは自立と結びつくと考えるならば,経済領域に進出する女性の比率が高ければ高いほど,なんらかの要因でそうした進出が阻止されている社会よりも,女性の地位は高いということになろう。

経済的な自立の手段が女性にも開かれているところでは,たしかに女性が男性に依存しなければならないという状況を避けることができ,自身の選択を行使できる可能性が高い。未亡人になったり,夫や息子と喧嘩しても,誰にも気兼ねせず一人で住んで自活することも可能である。しかし,ワドリーの説を単純に受け入れるわけにはいかない。いくつかの留保が必要である。

まず指摘できることは,生産活動に直接従事していてもそれだけでは男女の関係が対等になるというのではないということである。女性による生産物が質的あるいは量的に価値のあるものか[Madan 1976：71],生産物の管理が女性の手中にあるのか[Friedl 1975：8-9; Sandy 1973：1695]といった問題を考慮する必要がある。D村の場合,主要産物である魚はほぼ男性が獲得する。月経の汚れを恐れて,女性が船に乗ることは許されていない[16]。また女が生産する漁業以外の産物,たとえばマッタイやマットはけっして主要産物でも価値ある産物でもない。他の場所と異なり,D村では魚をとるのは男性,売るのは女性という分業が徹底していない[17]。地引網による大量の魚はコロンボに出荷され,販売に関して女性の手を借りることはない。筏やボートによる魚は女性が競りの

場所に運ぶが,競りをするのは専用に雇われている男性である。つまりこの場合でも売る側に特別の技術が必要というのではない。

女性がさまざまな仕事で得た報酬をどう使うかは,かならずしも一定しない。地引網漁では男性は労働の報酬として通常現金を受け取る。夫は一日の稼ぎのうち家計に必要な分を妻や母に渡す。筏やボートの漁師を夫に持つ女性は競りで金を受け取って自分で管理する場合もあれば,夫に渡す場合もある。女性が働いている場合,普通は女性が管理し,足りない分を男性から受け取って家計に当てる。若い娘の場合なら母か父にそのまま渡す。しかし,経済的に余裕があれば,おこずかいとなる。女性がかなり専門化し成功している場合は,実質的に彼女がすべて自分のお金で生活費をまかなう。

南西モンスーンの期間男性がキャンプ地で集団生活をする場合,村に残った女性はすでに夫が網元から受け取った契約金で生活する[18]。彼女が塩田などで働く場合は夫とはまったく独立して生計を立てることになる。

つぎに注意しなければならないのは労働の条件である。男女が同じ職に従事することができるからといって,両者は同じ条件のもとで働いているわけではない。干し魚や鮮魚を売る女たちについてはどうであろうか。ほかの地域からの指摘によると,商売をする女性にたいしては小売や仲買が扱う商品の数量や種類が限定されていたり[Swetnam 1988],女性であるという事実から活動領域が制限され,結果的に男性と同じ条件で商売することができないということがしばしば生じる[Lessinger 1986 ; Ram 1991：214]。

D村の場合,多くは夫の不安定な収入を支えるため,家計の足しに労働しているにすぎず,専門化してはいない。鮮魚を売る女性たちは,バスを利用して魚を売りに行くが,男性は自転車やオートバイなどを使って,かなり遠隔地で魚を売る[cf. Ram 1991：220]。またある程度成功していても,女性は家事や育児から完全に解放されているわけではない。こうした不平等を克服するために女性は男性に頼る必要が生じる。干し魚を市場で売って週に平均1000ルピーも利益を挙げる女性は,夫が網元であったり,近親に裕福な網元がいる場合が多い。換言すると助けを差し伸べてくれる有能な男性が身近にいない場合,女性の商売はその日の生活費を稼ぐだけが精いっぱいで必ずしもうまくはいかないのである。ちなみに塩田での賃金格差は女性の方が男性より一日につき2.5ルピー低い。

最後に女性が働くことに関するイデオロギーの問題がある。経済活動に参加する女性は夫との関係でなんらかの平等性を獲得するかもしれないが,それはあくまで家庭内部の問題にすぎない。働かない女性よりも働く女性が低いとみなされる事実も見逃すわけにはいかない。男女ともに女性の労働はかれらの貧しさや地位の低さのせいと考えてお

り,経済的な余裕ができると女性も働くことをやめてしまう[19]。塩田で賃金労働に従事する女性の場合,多くは生存のためにしかたなく選んだ道である。それは教師や公務員のような誇るべき仕事ではない。塩田で働くことを隠す傾向があること自体,女性の村の外での労働に偏見がある証左といえよう。D村の現状は女性の選択の幅を広げることはあっても,それがそのまま経済活動およびそれ以外の領域における男女の差異の解消に結びついているわけではないということも確認しておく必要があろう。

ここで政治的な領域について簡単に触れておく必要がある。ヒンドゥー女性のステレオタイプに較べて,D村の女性たちはより自由で,男性と同じように活動できる領域が広いかにみえる。しかしながら,女性は依然として公的な政治活動から排除されている。たとえば女性は村の集会に参加することはできない。

ギリシャの農村社会の調査をしたフリードルは,女性は公的な領域から排除されているが,世帯が社会の要であり,その運営を握っているのは女性である,したがって社会の実権を握っているのは,男性ではなく女性であるという議論を展開している[Friedl 1967][20]。しかし,地引網が主要産業のこの地域では,世帯は必ずしも生産活動の基本単位ではない。つまり世帯はD村においては経済的にはかならずしも重要な単位ではない[21]。したがって,たとえ女性たちが家の中で実権を握ったとしても,それが世帯を越えてなんらかの影響力を持つわけではない。個々の関係では女性は男を自殺に追い込むことができるかもしれないが,一致団結して男性を支配するわけではないのである。

8　結論

本論では,男女の関係,とくに女性の地位はかならずしも一義的に規定することはできないということ,またその性格をさまざまな文脈を無視して評価することも不可能であるという立場から,親族と経済の領域を中心にスリランカの漁村における女性の地位の分析を試みた。交叉イトコ婚,村内婚,妻方居住,単系出自集団の欠如,すくない持参金,末娘への相続慣習などの特徴がD村の女性のあり方に大きな影響を与えていることは容易に推察できる。しかし,それだけではなく,経済活動もまた漁民の女性のあり方を考える上で無視できないものである。そこで明らかになったことは,女性たちがさまざまな形で生産活動や生産物の流通経路に関与していることである。女性の経済活動は漁業に不可欠であるばかりではない。女性は経済活動を通じて自立するだけでなく,ときには収入の面で男性を凌駕する。

しかし,一方で女性の労働は男性の労働とまったく同じ条件のもとでなされるわけで

はない。商売の成功のためには男性に頼らざるをえないこともある。また女性が働くことを蔑む傾向が存在するのも事実である。女性が労働するのは多くの場合生存のためのやむない事情からであって,自立あるいは自己実現の手段ではない。個々の男女関係を見ると,そこにある種の平等的な関係を認めることはできても,それが村の政治領域に反映しているわけではないし,支配的なイデオロギーを形成しているわけでもない。

残念ながら本論ではイデオロギーの問題を取り扱う際に無視できない宗教の領域における男女の関係や女性のイメージ,役割分担について議論することはできなかった。今後は本論で考察した親族と経済における女性のあり方と理念を踏まえて,宗教の領域での女性問題を考察していく必要がある。さらに言えば,歴史的な変化とライフヒストリーの手法を取り入れた個々の女性の生き方に焦点を当てることで,ともすれば平板で静態的となりがちな女性像をマクロな次元とミクロな次元の両方から克服することができるはずである[22)]。今後は女性の地位をめぐって宗教など他の領域における分析を進めるとともに,方法論の問題についても議論を重ねていきたいと考える。

謝辞

スリランカの調査は Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research および London University Central Fund より資金援助を受けた。また南インドでの調査は科学研究費補助金による海外学術調査『ガンジス河流域の複合文化形成動因の比較研究』(研究者代表:長野泰彦,課題番号62041078)による。また筆者を快く迎えてくれたD村の人々に感謝する。

注

1) Brown[1981], Mukhopadhyay and Higgins[1988], Quinn[1977]を参照。

2) Lamphere[1977:616-20], Reiter[1975:15], Yanagisako and Collier[1987:37-38]を参照。

3) Gailey[1987:47-48], di Leonardo[1991], Meigs[1990], Mukhopadhyay and Higgins[1988:484, 486], Quinn[1977:183], Tiffany[1979:4], Whyte[1978:116]などを参照。

4) Hendrix and Hossain[1988]や Whyte[1978:118-19]を参照。

5) 以下の資料はスリランカにおける1982年6月より翌年11月の滞在期間中に収集したものである。

6) 以下の記述は主として Allen[1982], Dharuvarajan[1989:26-34], Jacobson[1978:95-101], Robinson[1985:188-95], Wadley[1977:113-20]に依拠している。

7) 1971年の統計資料では結婚の平均値は女性で17.2歳,男性で22.2歳である。15歳未満で女性が結婚することは禁止されているが,12%の女性が10歳から14歳の間に結婚している(10歳未満の

結婚については資料がない)[Leonard 1979：97]。

8) 1971年の統計資料では男性1000にたいし,女性930の割合である。また出生時における平均余命は女性が46,男性が47歳である[Leonard 1979：97]。

9) 地引網の操業および労働パターンについては[Tanaka 1991：36-43]を参照。

10) 男性の場合945人の成人男性中27人が教職や事務職についているが,女性の場合1000人中3人である。

11) ちなみに生産高が比較的高い11月から12月にかけての二ケ月の平均収入は筏漁師の場合998ルピー,ボートの場合は1558ルピーである。

12) キャンプ地では月極の契約がなされる。子供や老人は賃金も安くなる。

13) 667世帯の内女性一人の世帯が16件(2.4%),女性一人とその子供たち,あるいは彼女の老いた親が同居している場合は43件(6.4%)である。両者合わせると59件(8.8%)となる。

14) 女性の交換説をめぐってはGailey[1987：46-47], Moreland-Davies[1978], Quinn[1977：210]を参照。家族を単位にとれば,その間で交換に基づくある種の同盟が成立しているとも言えるが,妻方居住の規則を考慮するならば,そこで交換されるのは女性というよりは,男性である。D村のイトコ婚については詳しく別稿で論じる予定である。

15) 調査は1987年より1989年まで断続的に行われた。

16) ただし,浜辺で地引網を引くことはできるし,南西モンスーンの期間中男手のない女性たちは自家消費のために魚を獲ることがある。

17) 魚の販売が男女の分業に基づき高度に専門化している例としてStirrat[1988：76-79]を参照。

18) Ram[1991：142-43]によると,南インドの漁民たちの間では,移民の期間中男女の家計が独立する。この結果女性は村で保持していた家計を管理する権利を失ったと指摘しているが,D村の男性たちは移民の期間中少額のこずかいを受取るだけである。かれは,移民が終ってから前金を差し引いた残金を受け取る。このため,夫と妻が別々の家計を形成するということは一時的にせよ生じない。

19) Ullrich[1977：106]によると,女性が生産活動に従事する低カーストの方が,そうでないブラーマンよりも男女関係が平等であると論じている。しかし,女性の労働がスティグマであるかぎり,不可触民の男女関係はヒンドゥー社会全体にはなんの影響も及ぼさないという点を認識する必要がある[cf. Stirrat 1988：93-94]。

20) 女性の有する実権を強調する議論としてはほかに,Nelson[1974], Rogers[1975；1978：148-53]などを参照。

21) 筏やボートの漁師たちは夫婦を中心とする世帯が生産単位であると同時に消費単位でもある。これらの場合,男性は海で漁をして,女性はこれを市場で売るという分業が確立している。したがって,D村と異なり,筏やボートの漁が支配的な村では,当然世帯が重要な単位となり,女性の

立場はより強くなるといえる。この点については Stirrat [1988：89-94；1989：97-99] を参照。

22）類似の問題意識から女性の地位を分析したものとして Ram [1991] を参照。

参考文献

Allen, Michael

1982 The Hindu View of Women, in Micheal Allen and S.N.Mukherjee (eds.), *Women in India and Nepal*, Canberra：Australia National University. pp.1-20.

Brown, Penelope

1981 Universals and Particulars in the Position of Women, in The Cambridge Women's Study Group (ed.), *Women in Society: Interdisciplinary Essays*, London：Virago, pp. 242-56.

Dharuvarajan, Vanaja

1989 *Hindu Women and Power of Ideology*. New Delhi：Vistaar.

di Leonardo, Micaela

1991 Introduction, Gender, Culture and Political Economy：Feminist Anthropology in Historical Perspective, in M. di Leonardo (ed.), *Gender at the Crossroads of Knowledge：Feminist Anthropology in the Postmodern Era*. Berkeley：University of California Press, pp. 1-48.

Friedl, Ernestine

1967 The Position of Women：Appearance and Reality, *Anthropological Quarterly*, 40：97-108.

1975 *Women and Men: An Anthropologist's View*. New York：Holt, Rinehart and Winston.

Gailey, Christine W.

1987 Evolutionary Perspective on Gender Hierarchy, in Beth B. Hess and Myra M. Ferree (eds.), *Analyzing Gender: A Handbook of Social Science Research*. London：Sage, pp. 32-67.

Hendrix, Lewellyn and Zakir Hossain

1988 Women's Status and Mode of Production：A Cross-Cultural Test, *Signs*, 13 (3)：437-53.

Jacobson, Doranne

1978 The Chaste Wife：Cultural Norm and Individual Experience, in Sylvia Vatuk (ed.), *American Studies in the Anthropology of India*. New Delhi：Manohar, pp.95-138.

Lamphere, Louise

1977 Anthropology, *Signs*, 2(3)：612-27.

Leonard, Karen

1979 Women in India：Some Recent Perspectives, A Research Note, *Pacific Affairs*, 52(1)：95-107.

Lessinger, Johanna

1986 Work and Modesty：The Dilemma of Women Market Traders in South India, *Feminist Studies*, 12(3)：581-601.

レヴィ＝ストロース，クロード

1977 『親族の基本構造　上・下』(馬淵東一他訳)，番町書房.

Madan, T. N.

1976 The Hindu Woman at Home, in B. R. Nanda(ed.), *Indian Women : From Purdah to Modernity*. New Delhi：Radiant, pp.67-86.

Meigs, Anna

1990 Multiple Gender Ideologies and Statuses, in P. R. Sanday and R. G. Goodenough (eds.), *Beyond the Second Sex：New Directions in the Anthropology of Gender*. Philadelphia：University of Pennsylvania Press, pp. 101-12.

Moreland-Davies, Joan A.

1978 Women and Anthropology：A Critique of Lévi-Strauss and Exchange Theory, *Atlantis*, 3(Pt. 2)：116-29.

Mukhopadhyay, Carol C. and Patricia J. Higgins

1988 Anthropological Studies of Women's Status Revisited：1977-1987, *Annual Review of Anthropology*, 17：461-95.

Nelson, Cynthia

1974 Public and Private Politics：Women in the Middle Eastern World, *American Ethnologist*, 1(3)：551-65.

Quinn, N.

1977 Anthropological Studies of Women's Status, *Annual Review of Anthropology*, 6：181-225.

Ram, Kalpana

1991 *Mukkuvar Women : Gender, Hegemony and Capitalist Transformation in a South Indian Fishing Community*, Sydney：Allen and Unwin.

Reiter, Rayna R.

1975 Introduction, in Rayna R. Reiter(ed.), *Toward an Anthropology of Women*. New York：

Monthly Review Press, pp.11-19.

Robinson, Sandra P.

1985 Hindu Paradigms of Women : Image and Value, in Yvonne Y. Haddad and Ellison B. Findly (eds.), *Women, Religion and Social Change.* New York : State University of New York Press, pp. 181-215.

Rogers, Susan C.

1975 Female Forms of Power and the Myth of Male Dominance : A Model of Female/Male Interaction in Peasant Society, *American Ethnologist*, 2(4) : 727-56.

1978 Women's Place : A Critical Review of Anthropological Theory, *Comparative Studies in Society and History*, 20(1) : 123-62.

Rubin, Gayle

1975 The Traffic of Women : The Notes on the "Political Economy" of Sex, in Rayna R. Reiter (ed.), *Toward an Anthropology of Women.* New York : Monthly Review Press, pp.157-210.

Sandy, Peggy R.

1973 Toward a Theory of the Status of Women, *American Anthropologist*, 75(3) : 1682-700.

Stirrat, R. L.

1988 *On the Beach : Fishermen, Fishwives and Fishtraders in Post-Colonial Lanka*, Delhi : Hindustan Publishing Corporation.

1989 Money, Men and Women, in Jonathan Parry and Maurice Bloch (eds.), *Money and the Morality of Exchange.* London : Cambridge University Press, pp.94-116.

Swetnam, John J.

1988 Women and Markets : A Problem in the Assesment of Sexual Inequality, *Ethnology*, 27 (4) : 327-38.

Tanaka, Masakazu

1991 *Patrons, Devotees and Goddesses : Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka.* Kyoto : IRH, Kyoto University.

Tiffany, Sharon W.

1979 Introduction : Theoretical Issues in the Anthropological Study of Women, in Sharon W. Tiffany (ed.), *Women and Society : An Anthropological Reader.* Montreal : Eden Press Women's Publications, pp.1-35.

Ullrich, Helene

1977 Caste Differences between Brahmin and Non-Brahmin Women in a South Indian Vil-

lage, in Alice Schlegel (ed.), *Sexual Stratification : A Cross-Cultural View.* New York : Columbia University Press, pp.94-108.

Wadley, Susan S.

1977 Women and the Hindu Tradition, *Signs*, 3 : 113-25.

1980 The Paradoxical Power of Tamil Women, in Susan S. Wadley (ed.), *Power of Tamil Women.* Syracuse : Syracuse University, pp.153-70.

Whyte, Martin K.

1978 *The Status of Women in Preindustrial Societies.* Princeton : Princeton University Press.

Yanagisako, Sylvia J. and Jane F. Collier

1987 Toward a Unified Analysis of Gender and Kinship, in Jane F. Collier and Sylvia J. Yanagisako (eds.), *Gender and Kinship : Essays toward a Unified Analysis.* Stanford : Stanford University Press, pp. 1-50.